

夏の鶯

伊藤桂一 夏の鶯

東京文藝社

夏の鶯

三三〇円



昭和三十七年三月五日印刷
昭和三十七年三月十日発行

著作者 伊藤桂一

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文芸社

東京都新宿区牛込弘方町一
振替口座 東京二一七五七

夏の鶯

目次

夏の鶯 五

最後の戦闘機 四三

雲の扉 八七

雲の誘惑 一二一

海から来た男 一三五

罌粟の河 一九一

還ってきた男 二三七

夏の鶯

1

岩間の機が揚子江に墜落してから一ヵ月経った。彼は胸部の打撲で入院していたのだが、その間に季節は急に春めいていったようだ。しぶとく不死身な飛行機乗りが、一ヵ月も病院で暮したのは、よくよくの我慢であつたに違いない。

やっと軍医の許可を得て外出してみると、久し振りにみる町の風景は、激しい生気を躍動させて彼を揺すつてきた。生きている感慨——といったものが、死に損つたあとだけに、しみじみと胸を満たしてくる。

どこということもなく歩き廻っているうちに、小さな池のある公園に出た。同室に高柳という兵長

がいて親しくなったが、彼から聞いたことのある、これが多分この町の名勝、李鴻章公園なのかもしれない。

池のほとりに芽を吹きはじめた楊柳が並んでいる。池のなかのさざなみが春の流れ雲を碎いている。岸に繋がれたいくつかのボートが、ゆたゆたと水にたたかれて歌っている。公園というほどでもない、のどかだがさびれた趣きしかなかった。

そのボート置場から、ふたりの女を乗せて、いま漕ぎ出していった一隻が、櫂をあやつりながら、岸沿いに、岩間の立っている近くまで流れて来た。どうやらふたりとも漕げないらしいのだ。

わっわっとはしゃぎながら、水をはねあげて笑い興じてくるうちに、わざとなのか、櫂を一本水にとられてしまった。岩間が手をのばせばとどくほどのところまで、それが波に運ばれてきた。

ボートが漕ぎ出されて行く前から、岩間は岸に立って、彼女たちのあやうげな様子を、じっと眺めていたのだ。何度か微笑が湧いた。どこの女たちだろう？　まだ春浅い水の上。ふたりともネッカチーフを巻いている。ひとりは紅。ひとりは黄を。その紅のネッカチーフを巻いた丸顔の女が、なにかのはずみでちらつと岩間の方をみたときに、距離でいえば三四間もあつたのに、その潤んだまなざしが、ふいと岩間をふしぎな力でうち、そのまま彼をその場に釘づけにしてしまったのだった。

ふたりとも春めいた軽装でズボンを穿いていた。緑色の粗い毛編みのセータを、同じように身につ

けているが、黄色いネッカチーフの方は、下駄ばきを素足になつて荒っぽく乗り込んだりしたから、どうやら近くの兵隊相手の商売女でもあるらしくみえた。

岩間は、眼の前に流れ寄つてきた櫂を水から拾い上げると、それを手にしたまま、気軽に彼女たちに話しかけたものだつた。

「おれと一緒に乗せてくれないか。漕いであげるから」

ふたりの眼が、束の間岩間にそそがれ、今度はなにかヒソヒソ話しあつてたが、早口の語調の具合が、朝鮮語らしかった。すると黄色いネッカチーフの女が、声をあげたとつぜん笑い出し、もうひとり、やや羞らうふうに岩間をみながらいつた。

「船が近づかない。くるくるまわるヨ」

岩間は笑つて櫂を差出し、引寄せたボートに身軽に乗移つた。漕ぎ出すと、ボートはみるまになめらかな速度になり、うらうら陽のかがやいている、池の中心へすべり出した。

「兵隊さん。見馴れない服着てるネ」

と、黄色いのがいった。この女は、白粉つけるのも面倒くさい、髪もばさばさ、といった気さくな恰好だが、眼が細く悪気がない。

「うん。この間揚子江に、飛行機が墜ちたの知ってるか」

「知ってる。面白かった」

「あのときの飛行機に乗ってたのがおれさ」

あれッ？ と、素朴にびっくりした顔を見合し、急に、関心を深め出した眼で、今度は紅いネッカチーフの女がいった。

「それで、どこ怪我したの？ アタマ？ アシ？」

その、岩間にまっすぐそそがれてくる視線。特に美しいというほどではないにしても、明らかに朝鮮系の、あどけない情緒を匂わせている、睫毛の深い表情だ。内地の女たちのように、年中利害の計算を忘れずにいるのとは違った、或る放心を失わずにいる眼だ。

ああこの眼だ、と、彼女たちへのうけこたえは、いい加減にあしらいながら、岩間は、紅いネッカチーフの女の眼ばかりが気になった。どこかでみたことがある。なぜだろう？

なにに似ているのか？ 漠としてつかみがたかったが、次第に惹かれていくのを感じた。

彼は漕ぎながら、水を——空をみた。陽がキラリと臉を刺してきた。果もない蒼明な天——。（そうだ）と、そのとき彼はやつと思ひ出すことができたのだ。

機体が、まさに地を離れようとするときに、きまつて感じる、あの爽烈な充溢と、なにものかへの期待。（今度こそは終りかもしれん）と、埃をまきあげ、ふわ、と空へ吞まれかける刹那の、一種

明状し難い陶醉のなかに、しかし彼は自分の生命への、絶対な不死を信ぜずにはいられなかった。三年戦闘機の上で暮したが、機体が舞い上る直前に、迫ってくる天にむけて、「まだまだ」と自らに教えるゆとりをつねに持ち得てきた。だから揚子江の波の底からも浮上ってきたのだ。

その、空へまさに翔つときの、死へとも生へともつかない無心な憧憬に似た想いを、彼は、紅いネッカチーフの女の眼をみたときにも、なぜだか感じたのだった。彼は、この意味をもう少し深く考えてみようとしたが、いきなり黄色いネッカチーフの、笑いながらの叫びに遮られた。

「あぶないッ！ 衝突するヨオ」

振向くと、ボートは対岸すれすれに來ている。カーブして、再び池の中心にむけ漕ぎ出したとき、岩間ふと、紅いネッカチーフの眼が、非常な素朴さで、今度はいささかの恥らしいの色もなく、自分にそそがれているのをみたのである。みとれている、といった視線のありかただ。

「兵隊さん。菊江ねえさん飛行機好きなんだヨ。いつか乗せてやってくれないかな」

紅いネッカチーフの菊江は、そういわれてはじめて気がつき、無邪気なまばたきをしながら眼を伏せた。

岩間は漕ぐ手を怠め、煙草をとり出しながらいった。

「乗せてやりたいなあ。もう修理も終つてるよ」

「あの、落ちた飛行機？」

「うん。いい場所を選んで落ちたから、六時間で引揚げたそうだ。あいつはまだまだ使えるんだ。いずれ、敵の航空母艦とでも心中する奴だからネ」

さしうつむいていた菊江が、それでまた首を上げ、眼をまるくして岩間をみつめながらきいた。

「兵隊さん。もう何度も戦争した？」

「したネ」

「これからもする？」

「するネ」

「死なない？」

「死ぬ——だろうネ」

「死ぬ——」

ヒタと額にそがれてくる女の熱い視線を、岩間ふと、深い感慨でうけとった。年中、死ぬ死ぬと口癖で、まるで朝飯前のことになっていたが、（待てよ）と、改めて考えてくるものがあつたのだ。

水の上で、彼は、一時間余りも女たちと話した。黄色いネッカチーフの女の名が文子だということ

も、彼女たちの家が、東門街の一角にある第二永福楼という娼家であることも知った。今夜必ず遊びに行く、という約束もさせられた。一たん親しみだすと、菊江は、可憐さのにじみ出るようなしぐさをみせはじめ、岩間と別れるときも、

「きつとくるネ」

と、子供っぽくその手を握り、ややかなしげにもみえる、素直なまなざしで彼をみた。頭の芯がすすかにしびれるほどの想いで（美しい眼だ）と、そのときも岩間は感じたのである。

2

第二永福楼は、泥溝と葦と質の悪い食料油の匂いのいりまじっている裏通りの、甃石道しきいしみちに向いた古びた一軒である。ここには朝鮮人の慰安婦ばかりが、十五人ほどいた。軍と在留邦人のための施設だが、休日になると、酔っ払った兵隊どもが暴れ廻り、いつでも土間のガラスの二三板は割られる始末だった。それでも平日は、夜更けまでは寂しいくらいにしんとしている。

「ネ。文子にゃん（さん）ほんとにあの飛行機のひと、くるかしらん？」

「どうだかネ」

「ほんとに、くる？」

「くるといったから、くるだろネ」

「ほんとに？」

「うるさいなあ。そんなに逢いたきや、自分で呼んどいでよ」

灯点し頃になってから、菊江は、同じことを、しつこく文子にくり返した。くり返しているだけで、たのしかったのだ。土間の客待ちの長椅子に並んで、ふたりとも夕化粧を終えたあとは、みちがえる華やかさだ。彼女たちも、夜はみんな派手な振袖に着替えて、蝶みたいに階段を下りたり上ったりする。

「菊江にゃんは、あの飛行機乗りに惚れたネ？」

「うん」

「どこがいい？」

「男らしいもの。からだのなかで、ブルブル、プロペラの廻ってるような、元気のいいひとだもの。」

——あのひと、きつとあたしを好きになる」

無心に、もの恋う眼になって、菊江はじつと文子をみつめる。年期は、菊江の方が半年ほど古いが、齢は三つ下だ。二十六の文子は、このごろ揚子江通いの船員に血道をあげていて、夜中に汽笛を聴いてせつなく眼覚めることがある、などとしおらしいことをいうようになった。その文子も、菊江

の、どんなに男に裏切られてきても、未だにひとを純一に信じようとする眼をみると、いつも（かなわないなア）と思うのだった。菊江は、男を失ったときは、一晚客もとらずに泣き明かすのがしきたりだったが、翌日はよくあきらめて口に出さなかった。すると文子は、その彼女を抱いていたわってやりたい、いじらしさで眺めるのである。文子が菊江に、つききりみたいにして親しくしているのは、たぶん菊江のふしぎな純情さが魅力なのだろう。でも、今度の飛行機乗りも、きっと菊江を泣かせるにちがいない、と、文子は胸の底で心配せずにはいられない。

十時を大分廻ってから、約束通り岩間はやってきた。菊江は部屋にひきこもっていられず、今度も土間へ出てみたが、その階段の上で、何度目かによつと男の威勢よく入ってくる姿をみつけたのだ。

「あ、びあんぎ、わった（飛行機がきた）」

と、小さく叫びながら駆け降り、

土間で男の手をとると、待侘びきつた懐しきで、一回ぐるりと廻った。

「遅い。遅い。嘘ばかり吐いて」

と、肩で弾んだ息をしている。

「軍医をおどかして出てくるのに手間をとった。レイテが落ちたら、今度は上海に敵がくる。おれもせいぜいあと六ヵ月でこの世とおさらばなんだ、といったらやつとゆるしてくれたよ」

笑いながらいつている男の言葉は、菊江を素朴に悲しませはしたが、でも今夜こうして逢うことができた、という喜びの方が遙かに強かった。穴のあくほど岩間をみつめ、手をとって階段をのぼりながら、菊江は、胸が熱っぽく燃えているのをかんじた。いままでに、こんなにも男の情を欲しがったことがあっただろうか。

菊江の部屋は、窓掛が深く下りて、棚の上に燈芯だけが小さく燃えていた。女が紅い長襦袢だけになるのを、岩間はまだ飛行服のまま坐ってみていた。その長襦袢を脱ぎかけた眼が、艶を含んでチラと振り返った。

「いけない。みては」

みられているのを、たのしんでいる風にもきこえたが、彼は苦笑しながら眼を逸らせて、茶箆筒の上の花瓶に挿した桃や、陶器の魔法瓶の模様を眺めたりしていた。きまったように、その肌には蘭が描いてある。

と、女の匂いが強く身近にきた。

「あたしが、脱がしてあげる」

膝にしなやかな重みが来、非常な近さで女の眼が迫っていた。あらわな素肌が濡れて光ってみえた。それは燈芯の仄明りの底で、なにか水のなかにでもいるような妖しい喘ぎをうったえながら、み